

書 評

田和正孝 著

『石干見の文化誌』

昭和堂 2019年1月 270頁 4,800円＋税

石干見、この文字をみて何を意味するのか、読み方も分からない人もかなりいるのではないだろうか。これは、沿岸部に石や岩などを積んで構築する大型の定置漁具で、そのなかで潮の満ち引きを利用して石干見内の魚群を道具や手づかみで漁獲するという。かつて世界中で見られたが、開発による干潟の消失や漁獲量の多い漁船漁業の隆盛などにより多くが失われたという。読みは「いしひみ」または「いしひび」である。つまり古くからみられる漁具で、「漁具の化石」ともいわれているという。石干見の読み方について、著者は「いしひび」を採用している。

漁業・漁撈の地理学的研究はそれほど盛んであるとはいえないが、歴史地理学的研究となるとさらに少なくなる。歴史地理学的な漁業研究に関する単行本の成果も、決して多いとは言えない。そうしたなかで得られた本書の著者は、現代における国内のみならず東南アジア、東アジアやオセアニアをはじめ世界各地における漁業者による漁場での営みや漁業や海洋関係の文化地理的な現象について、人類学的視点も踏まえた研究を長年にわたって進めてきた。本書は、著者が1980年代末以降に関心を持った石干見の構造とその利用実態について、フィールドワークに加えて近代歴史史料も用いて国内外の各地の事例について説明をおこなった「歴史地理学」的な研究書である。すでに著者は石干見に関する多くの論考や編著¹⁾を著わしている。

石干見は主としておかずりの漁撈、農業者による漁撈としておこなわれてきたため、経済的な漁業の範疇ではなかったこともあり漁業研究の対象になってこなかったという。そうしたなかで1960年代以降、高度経済成長期のなかで埋め立てや干拓が進んで、失われつつある石干見の利用形態の記録と研究が、海洋民族学者の西村朝日太郎を中心に進められてきたと著者は記す。それらの成果を十分に踏まえつつ²⁾、前著や本書において

石干見利用の近代における歴史的な利用実態の復原研究と、現代にいきる石干見に着眼して研究を進めている。本書は次のような構成である。

第Ⅰ部 日本の石干見

第一章 石干見研究の系譜

第二章 石干見研究の問題群

第三章 石干見の呼称に関する考察

第四章 島原半島の石干見(スクイ)漁業

第五章 開口型の石干見

第Ⅱ部 台湾の石滬

第六章 台湾における石滬研究史

第七章 一九一〇年代の台湾本島における石滬漁業

第八章 澎湖列島北部における石滬の利用と所有

第Ⅲ部 新たな石干見研究に向けて

第九章 大西洋沿岸域における石干見研究の現在

第十章 石干見の文化誌

本書は大きく三部構成になっている。第一部は日本、第二部は台湾、第三部は大西洋地域の石干見と研究の展望を述べている。

第一部では日本の石干見を取り上げる。第一章では、石干見研究の系譜として、1970年代の海洋人類学者西村朝日太郎と早稲田スクールの貢献、1980年代以降はその研究が停滞した理由を述べ、近年の研究の特徴として漁業史的考察、分布と現況をあらためて問う研究、その利用形態を生態学的視点から考察する共時的研究、文化資源・文化財としての石干見をめぐる議論の4点を挙げている。

第二章では石干見研究の問題群としてこれまでの研究について、石干見漁業の歴史、石干見の名称、石干見資料のデータベース作成、石干見の漁業活動、石干見の保存・再生に関する研究を紹介し、今後の研究の可能性を述べる。データベース化については、沖縄の事例の場合、石干見の分布域と礁池(イノー)の面積との関係性や漁具の構造および構築技術の違い、所有関係、利用形態、

損壊の時期およびその理由などを整理する必要があるとする。今後の展開については、25～26頁の図2-2石干見研究における人的ネットワーク、図2-3石干見をめぐる保存・再生・活用の関係を示しながら、伝統的な漁具・漁法の利用方法について地域の人々が有する環境知や地域知を聞き取ること、歴史的資料の分析から所有関係や利用関係の分析、石干見を守る人々の運動や組織づくりをコーディネートし解釈する作業が地理学者のできることとして挙げている。

第三章石干見の呼称に関する考察では、石干見の分布と地方名、石干見の記録をめぐる、行政用語としての石干見を述べ、石干見の各地の呼称を基にした圏域を設定している。石干見は「イシヒビ イシヒミ」と読むというが、著者は「イシヒビ」という読み方を使用している。「イシヒミ」の呼称は1970年代1980年代の研究書に使われているが、地方名としては福岡県築上郡三毛門浦の漁法として昭和初期の文献に揚げられているもののほかは確認できていないとし、著者による各地のフィールド調査でもこの呼称を確認したことがないという(31頁)。「イシヒビ」の呼称は福岡県、大分県の周防灘沿岸にみられ、その語源は石で造られた箕すなわち石筵であろうとする(31頁)。そのためイシヒミではなくイシヒビという読みを採用している。

第四章島原半島の石干見(スクイ)漁業では、スクイの数、昭和初期と現在のスクイ漁業を詳細に解明し、最後に石干見への新たな意味の付与について述べている。59～67頁の昭和初期のスクイ漁業では、人々の暮らしのなかでなぜ石干見が必要になったのか、農村の生業歴生活史のなかでの石干見漁撈の位置づけについて、生産、流通、販売の流れを踏まえて詳説されている。

第五章開口型の石干見では、その技術と漁業活動の観点から、北九州、奄美群島、沖縄の開口型の石干見の実態と歴史を解明している。

第Ⅱ部は台湾の石滬(スーフー)の利用の歴史について日本統治時代の総督府の史料を用いた研究である。第六章では台湾の石滬に関して日本統治時代の記録、第二次世界大戦後から1980年代までの石滬研究、台湾における石滬研究の発展にわけて資料を紹介している。

第七章一九一〇年代の台湾本島における石滬漁

業では、台湾漁業を見る「内地」の眼について取り上げる。そのうえで、石滬漁業権免許申請資料を発見し分析した成果を記す。さらに、それと関係する台湾庁芝蘭沙崙仔、新竹庁苗栗一堡外埔庄の石滬についての事例を解明し、1910年代のその特徴を述べる。

第八章澎湖列島北部における石滬の利用と所有では、現在でも石滬が豊富に残る澎湖列島を事例にして、台湾総督府文書のなかに残る石滬漁業権免許申請資料を詳細に検討し、白沙島周辺の石滬漁業、各郷における所有状況、吉見嶼における利用について、その分布と歴史展開を解明した。

第Ⅲ部では新たな石干見研究の方向性について、ヨーロッパの石干見の事例を紹介し、今後の石干見研究の展望について取り上げている。第九章大西洋沿岸域における石干見研究の現在では、水中考古学的手法による石干見研究の可能性、考古学的成果にみる石干見の分布、大西洋地域の石干見としてフランス、イギリスの事例の紹介をおこなっている。

第十章石干見の文化誌では、さらなる研究の可能性について、石干見の地域文化誌の構築を過去の記録の検証と新たなデータの蓄積からおこなう必要性、現代社会のなかで石干見を再生・活用する地域の記録の大切さを述べている。そして、石干見漁の生態について詳細なフィールド研究の可能性と必要性について述べている。

巻末の参考文献一覧では、これまでの日本や台湾をはじめとした国内外の石干見に関する研究文献や資料・史料を完璧な形で網羅しており、後学には必見である。

次に本書の内容に関し、評者が気になった箇所を記していく。

石干見の研究は本書で詳細に取り上げられてきたように西村朝日太郎が主導して進められてきた。西村とその関係者の研究を繙くと³⁾、その視点の広さと詳細なフィールドワークに基づいた海洋民族学という分野が確立しつつあり、早稲田大学には海洋民族学研究所が設けられていたことに気づかされる。その後、西村が早稲田大学を退職した1980年代以降になると網野善彦たちが主導して日本列島の海の民俗学や海民史、漁業史研究が進み、その潮流は西村の弟子の小川博(海事史研究)、矢野敬生(文化人類学)、高桑守史(民俗学)

たちに受け継がれた。しかし、西村の視点を発展させながら早稲田大学が当該研究の拠点としての役割を果たしているのか、少々疑問に感じている。そうしたなかで著者は、編著に入った2007年の前著において西村の薫陶を受けた研究者たちと連携して石干見研究を再び進めたことは、「西村海洋民族学」の再評価につながったのではないだろうか。西村と著者の石干見研究の違いは、これまで等閑視されてきた台湾の石滬研究を歴史的に解明したこと、生態的な視点を踏まえながら漁業者による石干見利用の実態を解明したこと（第五章）、失われつつあった国内の石干見を地域おこしで復活させる動きと国内外の石干見のある地域の連携に注目したことがあげられる。

歴史、地域史と石干見との関わりについては、本書を踏まえさらに検討する余地があるかもしれない。近世期の状況については西村朝日太郎が紹介した1707年とされる『島原御領村々大概様子書』⁴⁾を用いて島原半島の石干見（スクイ）の数を記している（56頁）。島原藩領におけるこの史料と関係する同年代の文書、または近世後期の同様の史料があればさらに詳細な研究が可能であろう。石干見の位置に関して、その設置基準が集落に近いところなのか、漁場として良いところなのか、そのどちらなのか知りたいところである。例えば島原半島では「農村」の前海にスクイを多く築いていたという。そして、近世以来の浦である「船津」集落の前海には第二次世界大戦後に新しくスクイが築かれたとある（68頁）。つまり、元々は漁船漁業中心の「船津」の前海にはスクイがそれほど設置されていなかったのではないか。このことは海の利用という視点からの「漁船漁業」と「農閑漁業」の違いにも関わってくる。石干見には、海の専業漁業者というよりも、農業者も関わっていたという。著者は「副業」としているが（55頁）、67頁では「自給的」とは一概に言えないとも記している。副業と自給的利用の違いについて石干見漁業からの見解を示していただければと思われる。石干見と陸とのつながりについて、本書では石を陸で再利用していたことを明らかにしている（63頁など）。石干見は石垣でもある。この石垣の構築は関係者のみでおこなったところが多いとされる。その築造技術などに関して、例えばいわゆる猪垣やシシ垣、その他の石垣

などの構造や築造方法と共通する点の有無について知見があれば、陸と海をつなぐ石干見の文化が見えてくるのではないだろうか。台湾の石滬に関する生態人類学的な史的研究は台湾漁業史研究においてもなかった視点であり、貴重な研究成果とみなされる。そのうえで時代背景や他の生業との関わりの中での石滬の営みが解明されれば幸いである。

石干見の「データベース化」の意義について、著者は台湾で悉皆調査の報告書にある集落ごとの石滬に関する概説（石滬の命名、漁獲対象魚種、補助漁具、石滬漁撈にまつわる習俗など）、石滬の数や名称、大きさや形態などを調べることが、地域における石干見の分布状況、呼称や漁具としての構造、利用形態、所有形態などを比較検討するために不可欠であるとする（17頁）。これは、各石干見の履歴書とも換言できよう。現況に加えて著者が研究を進めることで浮かび上がった明治期の石干見や台湾の石滬の個別データを加えた石干見データベース作成は、全国の沿岸部の各漁場の過去から現在までの履歴を入力した「漁場データベース」の展開にもつながっていくものと思われる。データベースの問題とも関わるが、本書では石干見の文化圏の設定も試みられている（35頁）。特に九州地方では東部の豊前海で「イシヒビ系」、西側の有明海、東シナ海側で「スクイ系」の名称があることが示されている。こうした分布の傾向が石干見以外の他の文化的な要素で見出せないか、気になるところである。

石干見に関する民俗的な事象については、人々のくらしと深くかかわる漁具や漁業、漁場に関する伝説や昔話として伝承されているものもある。石干見については、本書で触れられていた島原半島有明町大野浜の海岸沿いの「ボラ塚」（供養塔）に関する伝承がある（53頁）。86頁の奄美大島龍郷町瀬留のカキ（石干見）には「平家漁法跡」という説明板が掲げられ、この漁法を平家が伝えたという伝説があるという。また39-40頁には福岡県築上郡椎田町において菅原道真伝説（901年）に石干見が登場することが紹介され、「菅公左遷ノ際御船石干見に欄坐セルヲ漁夫等授ケ網ヲ敷キテ海浜二憩ワセ進ラセリ」とある。著者は出来事としては興味深いのが当時存在したことを証明する記述ではないとしている。この記述は当時ではない

としても、昔は石干見が船の係留に何らかの役割を果たしていたと解釈することは難しいだろうか。31頁で鹿児島県阿久根の石干見は「ハト（波止）」とも呼ばれたとある。安易な判断は控えたが、港の波止場と併用、もしくは転用された事例のあることも推測される。再利用については、63頁に島原半島のスクイの波止利用や道路への石の転用、95頁に石垣島のカキに使用されていたサンゴ石灰岩が戦時中、道路改修、飛行場建設に転用されたことが紹介されている。また、衰退の理由について、95頁で石垣島ホウマイツは1990年ごろまで盛んにおこなわれていたが、その後漁業を専業とするイトマン（糸満）がこの地に入り沖合において漁網で漁獲したためカキに魚群が入らなくなったことを紹介している。

最後に本書で展開される視点と研究調査手法の意義について言及する。本書では石干見を通した自然と人との関わりを詳細なフィールドワークと歴史史料の分析から丁寧に描いている。本書からは、著者が国内外全ての石干見をみて、調査記録しようとする執念、そして石干見研究がいかにおもしろいかということを読み取ることができる。例えば、調査先で関係者からの聞き取りで得られた格言ともいうべき重要な一言一言（「魚は潮に育つもの」（72頁）「アミがなければ稲刈りができん」（81頁））をはじめ人々と海との関係が詳細に記され、本書でよく使われる「環境知」「自然知」を知ることができる。本書では著者の撮影した過去30年にわたる国内外各地のイシヒビの写真が掲載され、干満差や季節の違いを踏まえながら石干見利用を理解することができる。フィリピンの石干見（アトブ）の写真（口絵写真12）は漁業者の漁船からの撮影だと思われ、干出する前で海中に石干見がある。潮の満ち干きや季節の違いで姿を変える石干見の写真をさらに比較することで新たな知見が得られるものと思われる。漁業の場合、漁場に行ってもその操業風景を撮影することは難しく、さらにデータを得る場合、潮の具合の異なる時に行くことも必要となるため調査は困難を極めることが多い。著者の写真からはその苦労をうかがうこともでき、フィールド研究の楽しさと難し

さを感じることも可能である。また本書には藪内芳彦氏をはじめとした先学の撮影した50年～20年近く前の貴重な写真も掲載され、著者が撮影した写真との比較からその変容も考察されている。石干見の絵画資料についても、45頁で『熊本県水産誌』（1883年）が取り上げられている。写真資料や絵図、絵画資料の活用の点からみれば、本書で得られた知見を踏まえ各地の沿岸部の古写真の点検や、近世期の絵図、名所図会、絵馬などの読み直しを進めると、石干見をはじめとした漁具の発見があるかもしれない。本書からは、徹底した現地のフィールドワークと古文書や絵画資料、写真の調査、分析を組み合わせた研究手法を学ぶことができる。本書は地理学関係者のみならず歴史学、民俗学、文化人類学、考古学、水産学などに興味のある人、調査研究に入ろうとしている若い学徒といった多くの方々にとっていただきたい一冊である。

（橋村 修）

〔注〕

- 1) 田和正孝編『石干見に集う』関西学院大学出版会、2014。田和正孝編『石干見のある風景』関西学院大学出版会、2017。
- 2) 筆者は西村朝日太郎の弟子にあたる研究者たちと石干見研究の著書を著わしている。田和正孝編『石干見—最古の漁法（ものと人間の文化史）』法政大学出版局、2007、313頁。
- 3) 西村朝日太郎『海洋民族学論攷』岩田書院、2003、667頁。本書は西村の単著に入っていない海洋民族学関係の論考（邦文、欧文を含む）をまとめたものである。編集を担った西村の弟子の小川博による解説が付され、今では入手の難しい文献も収録されている。海洋民族学、漁業地理学などに興味をもつ人には必見の文献である。
- 4) この文書は、次の文献で紹介されている。西村朝日太郎「漁具の化ける化石、石干見の法的諸関係」比較法学5-1・2、1969、73-116頁。